

平成24年度 学校自己評価表(中間評価)

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の 重点目標	1 主体的学習者の育成 2 進路指導の充実 3 積極的な活動の創成 4 広報連携力の強化 5 専攻科教育の充実 6 定時制教育の充実
-------------------	---	--------------	---

年度当初					評価結果		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期の改善方策
1. 主体的 学習者の 育成	文武両道 と規律ある 生活による自立 の促進	・学校の中が品位ある言動に満ち、落ち着いた雰囲気を感じられる。 ・生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・全員が部活動に加入し、部活動が日々の学習の下支えとなるような主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性のある指導ができる。	・気持ちのよい挨拶ができるようになったが、計画性のない行動や服装違反が一部見られる。 ・周りに気配りができず、環境整備や規律徹底に向けて協同性を発揮できない生徒がいる。 ・部活動の加入率は高いが、高い目標を持ったけじめある練習や部室管理がうまくいっていない部がある。 ・生徒に自ら範を示し、生徒の心に火をつけようと努力している職員がいる。 ・具体的項目の実現に向けてアンテナを高くして分掌学年の仕事を推進しようとしている。	・気持ちのよい挨拶や服装を整えることなどがなぜ大切なのかを説明するとともに、指導7項目の遵守を徹底するよう、時期を逸せず全職員で指導する。 ・生徒の主体的な活動を組織し、生徒会執行部や生活環境委員等を推進役とし、環境整備、規律徹底を推進する。 ・部室管理や部活動時間の遵守を顧問と協力して推進し、部活動と学習の両立を図る。 ・分掌、学年が協働性を発揮しながらそれぞれの任務を遂行することで、担任の生徒との面談時間を保障し、担任が生徒指導に全力で向かえるようにする。 ・分掌再編の取り組みを定期的に検証し、課題を発見した場合は分掌、学年が柔軟に対応して速やかに適切な対応を行う。	・校内でのあいさつはよいが、その態度が校内にとどまってしまっている状況もみられる。 ・学園祭を通じて、清掃の徹底を実践できた。その姿勢が継続し、日常化していくことが課題である。 ・部室点検などで、部室の使用状況はよくなってきている。学習を理由に部活動をやめようとする生徒が若干だがいる。 ・担任の生徒との面談時間が確保できている。分掌と学年の協働性については、今一歩で、学年の行事等に対する学年部員の協力に温度差ができています。 ・職員間で分掌再編の目的を確認しながら協働性を高めてきているものの、いまだ「率先垂範」という状況にはなっていない。	B	・引き続き、全職員で呼びかけ、指導をしていく。 ・後期生徒執行部を中心に、校内環境の点検を実施し、清掃不十分などなどを指導する。 ・もう一度部活加入状況を調査し、部顧問だけでなく、学年、分掌、教科と連携して生徒をサポートする。 ・分掌部長と学年主任の情報交換を定例化し、行事を先取りして、企画は分掌、運営は学年と連携して行事運営を行う。 ・定例職員会議や職員研修等の機会をとらえて、粘り強く職員間で協働性についての共通認識をする。
	「協同的な 学び」の研究 推進	・授業を通して、各教科の魅力や奥深さが生徒に伝わり、学習が内発的・主体的なものとなっている。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなっている。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて、教員が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。 ・「協同的な学び」をはじめとした、指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 ・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 ・生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 ・教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・年度の初めに「協同的な学び」に係わる先進校教員を招聘し、教員を対象に理論と概要について研修の場を設け、理解と意識の向上を図る。 ・重点教科を設け、先進校教員との示範授業・研究授業・授業研究会を通して指導力の向上を図る。(国・英・理・体) ・アドバイザーを委嘱し、中間評価・最終評価をはじめ年間を通して本校の取り組み全般の改良改善を図る。 ・実態把握のできる分析・評価法を研究し実践する。 ・「協同的な学び推進チーム」のミーティングを適宜行い、計画の進捗状況を確認するとともに、分析と評価を行い、課題の解決を図る。 ・教科専門研修に積極的に参加し、その内容を教科内あるいは全職員で共有し日常の授業で活かす。 ・「協同的な学び」通信を適宜発行したり、教務室に関連図書を常設するなどして啓発を行う。	・5月2日に県外講師を招き理論と概要についての研修を行い、協同的な学びへの導入をはかった。 ・英語、国語については計画通り研究授業、示範授業、授業研究会を実施し、各教科において考え方や方法を深めた。また、今後も理科と保健体育についても実施予定である。 ・授業アンケートの項目に関して、アドバイザーの意見を取り入れた。評価内容についても意見を伺うこととする。 ・「協同的な学び推進チーム」のミーティングは発足の会をもったが、評価の集約は教科学年主任会で行っており、その後は開いていない。 ・教科専門研修には、5教科で参加し研修している。理論研修にも参加しており、職員研修の場にて全職員に報告している。 ・通信による啓発を月に1度行っている。関連図書を購入し、職員室に常設しているが、盛んに購読されているほどではない。	B	・来年度の計画を立て理論研修を継続し、教員の指導力の向上を図る。 ・今年度の保健体育の計画を早急に立てる。また、来年度の教科研修の計画を立て指導力の向上を図る。 ・アンケート結果をアドバイザーに見ていただき、意見をいただく。 ・重要な項目についてはミーティングを開催し、意識の共有を図る。 ・他校での協同的な学びに関する公開授業の案内が届いている。職員に案内し事業を促進する。 ・通信は今後も継続して発行する。関連図書も増やし、事業を啓発していきたい。
2. 進路指導の 充実	OJTの充実 と進路指導力の 向上 ※OJT オン・ザ・ ジョブ レーニング	・進路指導に関する必要な情報を提供したり、研修の場を設定することにより、全職員が進路指導に関わろうという意識を持ち、適切な知識や技能を習得している。 ・生徒が「学力＝生活力」であることを自覚し、その意義が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望や適性を理解した上で、望ましい将来像を示しながら、3年間のどの段階においても適切な指導を行っている。	・知識や技能に個人差があり、進路指導が担任など特定の教員に偏る傾向がある。 ・多くの生徒が適切な目標を立て、望ましい進路選択を行っているが、意識が「受験学力」を高めることにとどまってしまう傾向が一部の生徒に見られ、指導に改善の余地が残る。 ・進路研修会等様々な場面を設定しているが、進路指導の知識や技能をうまく伝承しているとは言えない。	・担任を中心に学年部が一体となって進路指導に当たる。 ・学年を中心に家庭学習時間・模試結果・志望など生徒に関する情報を綿密に分析し、そのデータを学校全体で共有しながら、データ活用能力を高める。 ・全職員が、全ての学校教育活動が「倉吉東高校のかたち」に基づいて行われていることを認識し、授業や進路指導など様々な場面で生徒・保護者へ本校教育理念を浸透させ、受験を通して自らを高め、社会に関わろうとする意識を高める努力をする。 ・研修会などの特別の場面のみでなく日々の取り組みが自己を向上させるということを理解し、自主的に学ぶ姿勢を持ち、進んで進路指導力を高める努力をする。	・担任と学年部員とのコミュニケーションが不十分で情報が共有できていない。 ・3年・専攻科だけでなく、1・2年も志望校調査や判定会を行い、生徒に関する適切な情報の収集と、その活用に努めている。 ・「進路のしおり」や「学びの復権」を読んだり、講演会、大学や職業に関する調べ学習を通して、学びの目的や意義を正しく理解する生徒が増えてきているように感じる。 ・校内での研修会の参加率が低い。	B	・学年部員が学年会の資料を熟読し、学年部全体の動きを把握すると同時に、必要な情報を的確に発信する。 ・会議の場だけでなく、日頃のコミュニケーションの中でも情報の共有に努める。 ・学習だけでなく、学校行事や部活動などでも「倉吉東高のかたち」に触れ、生徒の一層の理解と浸透を図る。またHPや配付物を通して保護者の理解が深まるよう働きかける。 ・自主的な参加が増えるよう、研修会の目的やメリットを伝えていく。
	中堅・難関 大学合格 者数の発展	・地域を代表する進学校としてふさわしい実績を維持し、向上が期待できる。 ・現役合格者数150名以上。 ・中堅大学レベル以上合格者数70名以上。 ・難関大学合格者現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	(現役合格) ・H23年度145名。H22年度157名。H21年度175名。 (中堅大学レベル以上) ・H23年度66名。H22年度67名。H21年度83名。 (難関大学) ・H23年度21名。H22年度16名。H21年度33名。 (東京大学) ・H23年度3名。H22年度6名。H21年度4名。	・すべての生徒にCT(センターテスト)に対応できる学力をつける。 ・1年次から継続して志望校指導、受験校指導を行う。 ・2次試験に必要な力をつけるために、グレードに合わせた補習授業や・課外の在り方を工夫する。 ・卒業生や専攻科生に接したり、県内外での難関大合宿などに参加することで、目標に対するビジョンを明確なものにできるよう指導する。 ・文理学術クラスを学年のリーダーのクラスに成長させるため、学力だけでなく人間力の面でも学校全体で一貫した指導を行う。 ・東大志望者のチーム力を高めるとともに、東大の入試問題を研究し、前年度の結果をデータとして活用する。	・各学年とも丁寧な下位者指導を行っているが、依然として進研模試で全国SS50以下の生徒が残っているのが現状である。 ・1年次から志望校指導を行い、生徒の目標の適正化に努めている。 ・夏季休業中の課外や、放課後課外で2次試験対応力の育成に努めている。 ・大山合宿では先輩から様々な刺激を受けた3年生が多かった。8月の2年県難関大合宿には国際高校生フォーラムと重なったため、参加できなかった。 ・3年だけでなく、2年の学術クラスにも少しずつ成長の跡が見えてきた。 ・3年・専攻科については、他校との合同東大対策などを通じて本校のチーム力を高めるとともに、他校からも刺激を受けている。2年生にも徐々にチームとしての意識が芽生えてきた。	C	・必要に応じて個別の指導を行いながら、模試での具体的な目標を持たせ、学習意欲を喚起する。 ・今後も志望状況の把握に努め、志望に変更があれば速やかに対応する。 ・センター試験後の2次課外が効果的なものになるよう、課外に関する計画を策定する。 ・これから行われる3年東大講座(9月岡山)、2年難関大合同合宿(11月岡山)、1年県主催難関大合宿(12月鳥取)には意欲的に参加させたい。 ・1・2年の学術クラスがさらに集団としてまとまるよう学習だけでなく、生徒会活動など色々な場面で刺激を与え、さらに社会性を高めたい。 ・3年・専攻科の東大志望者への指導を継続するとともに、1・2年についても学年段階に応じて東大を目指す意義やメリットを伝え、チームとしてもまとまりを強めていく。 ・教科ごとに東大入試問題を分析・報告するなどの具体的方策を検討する。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期の改善方策
3. 積極的な活動の創成	活動創成と人間関係・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・各学年にリーダーシップのとれる生徒が一定数おり、その生徒を他の生徒が積極的に支えようとしている。 ・生徒自身が社会に関心を持ち、社会的課題に対して主体的にアプローチしている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少ないが、まだその資質を十分に発揮できていない面もある。 ・自らを中心にいった関心の同心円が、もっと広がっていく余地がある。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事を通して、リーダーシップを発動できる場面を数多く設定する。部活動においては適切な目標を立て、計画的で活発な活動ができるようにする。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、より広い社会へとつながっていけるようにする。	・行事を通して、生徒会執行部や実行委員がリーダーとなり全校生徒の積極的な活動を促し、学園祭・高校生国際フォーラムを成功に導いた。部活動では、全国大会での活躍を含め、活発に行われている。その反面、途中で部活動を辞めた生徒や活動の消極的な生徒もいる。 ・プレゼンテーションコンテストの研究支援会への教員の参加も多く、例年以上に充実した発表内容となった。国際高校生フォーラムでは発表者や実行委員以外の生徒の参加意識が低いと指摘を受けている。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動に積極的に取り組み達成感を得ている生徒も多いが、依然として消極的な生徒も見られる。	B	・後期生徒執行部への引き継ぎをしっかりと行い、課題を明確にして積極的に取り組ませる。 ・部活動の活動状況を正確に把握し、学年と部顧問が連携して活動できる環境を作る。 ・国際高校生フォーラムへの参加意識を高めるために読書小論文活動やチューター制度なども連携させて、生徒の主体的姿勢を醸成する。 ・日常的に取り組める委員会活動の内容を再検討し、多くの生徒が取り組めるようにする。 ・自らが学んだこと、得た力を日常生活に生かせるよう感想文を書くなど言語化させる活動をする。
		・各生徒が自己肯定感を持ち、他生徒に対して敬意を払いながら、協同してよりよい環境を作ろうとしている。 ・自分や社会の将来について先見性を持ち、それに必要な力を自覚し、主体的にその力をつけてようとしている。	・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、自らの持つ資質に自信が持てないまま、学校生活に消極的になっている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、現在における自分の状況や感情にとらわれて、やるべきことの優先順位を見極められない場面も見られる。	・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通し、自らの役割を果たす喜びを感じさせる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自らの手で計画、準備、運営させて行くことにより、見通しや段取りを大切に作る態度を育む。	・行事をととして、成功や失敗の中から多くのことを学び、成長していく姿が見られる。しかし、その学びが日常生活の向上につながっていない生徒も散見される。		
4. 広報連携力の強化	積極的な広報活動による地域や中学校からの共感の促進 育友会・同窓会との連携促進	・地域の方や各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されている。 ・本校が各中学校の実態を十分理解しており、生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 ・本校の進路指導や大学の現状に対する保護者の理解が深い。	・本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・管理職だけでなく、多くの教員が中学校訪問を行い、本校の教育について説明をしている。 ・倉吉東中学校と「スクラム教育推進事業」を行い、英語・数学における連携を深めているが、全教科・領域の連携に至っておらず、中学校の状況が十分に理解できているとは言えない状況にある。 ・中学生特別講座を実施し、中学レベルを超えた英語力の育成を支援している。 ・「中部地区小中学校・高等学校連携推進事業」によって英語・音楽・体育の教員派遣を行っている。 ・保護者に対しては、8月、2月の進路講演会の他、11月に大学見学会を実施して、情報提供を行っている。	・本校のHPを通じて、教育活動の様子を適切に外部へ情報発信できるよう努める。 ・中学生を対象とする高校説明会を充実させ、本校への進学意欲を高める。 ・中学校主催の説明会や進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、キャリア形成部や企画推進部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 ・倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」を充実させるとともに、中部地区全体の中高連携を促進する。 ・公開授業等を積極的に利用して、中学校教育の状況把握に努める。 ・部活動でも中学と合同練習を行うなど、可能な範囲で交流を行う。 ・中学生英語特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、ティームティーチングなど)を呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・保護者対象の進路講演会や大学見学会への参加者を増やすとともに内容を充実させ、保護者の理解を深める。	・HPは適切に更新されており、学校の情報を外部に発信できている。 ・体験入学では、高校生のチューターによる施設案内が好評であった。しかし参加中学生の名前の把握ができていなかったため、運営面でやや支障をきたした。 ・中学主催の説明会は多くの教員が中学に出向き、説明した。 ・学校訪問の対応については、管理職・企画推進・キャリア形成中心の対応であった。 ・スクラム教育・中高連携は2年目となり内容も充実してきた。 ・倉吉東中との相互参観や、エキスパート教員の公開授業等の情報が発信され、中学校に出向きやすい状況ができている。部活動でも、バスケット部、ソフト部、卓球部、サッカー部などで、合同練習等が実施されている。 ・中学校英語特別講座は参加者88名で昨年より減少、9月22日から全5回で実施 ・出前授業には、中学校の要請に応じて教員を派遣している。 ・保護者対象の大学見学会は、11月14日(水)に実施予定。今年度は鳥取環境大学、鳥取大学を訪問し、施設見学や本校OBの学生との懇談を行う。	B	・保護者のアクセスは多いが、中学生のアクセスが少ないので、高校説明会等を通じてPRする必要がある。 ・来年度は申し込み段階から中学生の氏名も把握し、体験授業のクラス分けや、施設見学のグループ分けを適切に行い、スムーズな運営を目指す。 ・事前に受けた質問内容に応じ、他の分掌の教員も積極的に関わっていく。 ・中学校との連携を密にし、今後も継続していく。 ・中学生や中学校教員及び保護者に英語特別講座の意義を広報しつつ、今後も継続していく。
		・昭和36年に専攻科が設置された意義を理解し、感謝の気持ちを持つとともに、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによって、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、個人的自己実現から社会的自己実現の学習へと深化している。 ・専攻科生が「主体的な学習者」としての姿を見せることにより、現役生をリードしている。 ・専攻科全体でのセンター点の伸び平均が100点を超え、難関大合格10名、国公立合格50名となっている。	・生徒は感謝と公共の精神の大切さについて理解しており、校内では挨拶や清掃活動、現役生への進路チュータリングなどの活動に積極的である。しかし、地域社会で評価されるまでには至っていない。 ・受験学力をつけるだけでよいと考える生徒はおらず、社会的自己実現を志向する意義を理解しているが、社会経験に乏しく、本当の力がついているとは言えない。 ・現役生への「進路チュータリング」や「学び祭り」のプレゼンなどで専攻科生の取り組みを伝えているが、十分とは言えない。 ・例年より幅広い学力層の生徒への指導が必要である。	・専攻科で学ぶ意義について折に触れて説明し、専攻科が単に大学合格だけを目指すところではなく人間力を高める場であることを理解させる。 ・自主的なボランティア活動への参加を促すとともに、地域との交流など校外行事を計画し、地域社会と直に接することにより「役立ち感」を体験させるなど社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。 ・従来から実施している「学び祭り」を充実・発展させ、発表テーマの設定・研究及びプレゼンテーションの内容を深化させる。(INPUT学習からOUTPUT学習への転換) ・県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。(専攻科2、3年生6の計8クラスの受験生の集団化) ・現役生への進路チューターや出向授業を行い、自身の取り組みを振り返るとともに「学ぶ者」としての範を示す。 ・早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立するとともに、面談を充実し適切な目標設定のもとに着実に学習に取り組めるようにする。 ・専攻科OB・OGを招き講演会を開くなど、生徒の意欲を喚起する工夫をする。	・朝7時には開館し、早朝学習を定着させた。8時前には全員がそろい、遅刻をすることもなく、1限に落ち着いて向かっている。 ・「学び祭」だが、予選では66テーマ、本選では3日間にわけ、20テーマについてプレゼン・質疑応答した。学びの楽しさを知っただけでなく、個人的自己実現から社会的自己実現を目指す意味がわかったようである。 ・入試問題の出典を調べさせたりするなかで、県立図書館や市立・学校図書館に御世話になり、主体的読書活動を行っている。 ・夏には、例年より早く3年生との合同課外を実施し、現役生の牽引役を務めた。 ・2年生とのスクラム教育を英語と数学で実施し、後輩を指導しながら、伝えることの難しさを感じた。 ・帰省している専攻科OB・OGのミニ講演で、先輩から見通しのつく話をしてもらった。		・「学び祭」以後も、量は減るものの、質の高い読書を目指して、図書館を利用させる。 ・まだまだ、単なる浪人生との認識が校内にもあるので、「学びチューター」としての役割を果たすべく、現役生への出前授業を積極的に行う。 ・秋・冬、と夏以上に3年生との合同課外は増えるので、現役生を刺激するだけでなく、受験生の不安を取り除くべく良き相談役になるよう指導する。 ・学校に在ること満足しないよう、引き続きこまめに面談する。 ・センター前や前期試験前後に、引き続き、帰省しているOB・OGに経験談を話してもらう。
5. 専攻科教育の充実	予備校との差異化と適正な進学実績の維持 閉科後の備え	・昭和36年に専攻科が設置された意義を理解し、感謝の気持ちを持つとともに、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによって、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、個人的自己実現から社会的自己実現の学習へと深化している。 ・専攻科生が「主体的な学習者」としての姿を見せることにより、現役生をリードしている。 ・専攻科全体でのセンター点の伸び平均が100点を超え、難関大合格10名、国公立合格50名となっている。	・生徒は感謝と公共の精神の大切さについて理解しており、校内では挨拶や清掃活動、現役生への進路チュータリングなどの活動に積極的である。しかし、地域社会で評価されるまでには至っていない。 ・受験学力をつけるだけでよいと考える生徒はおらず、社会的自己実現を志向する意義を理解しているが、社会経験に乏しく、本当の力がついているとは言えない。 ・現役生への「進路チュータリング」や「学び祭り」のプレゼンなどで専攻科生の取り組みを伝えているが、十分とは言えない。 ・例年より幅広い学力層の生徒への指導が必要である。	・専攻科で学ぶ意義について折に触れて説明し、専攻科が単に大学合格だけを目指すところではなく人間力を高める場であることを理解させる。 ・自主的なボランティア活動への参加を促すとともに、地域との交流など校外行事を計画し、地域社会と直に接することにより「役立ち感」を体験させるなど社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。 ・従来から実施している「学び祭り」を充実・発展させ、発表テーマの設定・研究及びプレゼンテーションの内容を深化させる。(INPUT学習からOUTPUT学習への転換) ・県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。(専攻科2、3年生6の計8クラスの受験生の集団化) ・現役生への進路チューターや出向授業を行い、自身の取り組みを振り返るとともに「学ぶ者」としての範を示す。 ・早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立するとともに、面談を充実し適切な目標設定のもとに着実に学習に取り組めるようにする。 ・専攻科OB・OGを招き講演会を開くなど、生徒の意欲を喚起する工夫をする。	・朝7時には開館し、早朝学習を定着させた。8時前には全員がそろい、遅刻をすることもなく、1限に落ち着いて向かっている。 ・「学び祭」だが、予選では66テーマ、本選では3日間にわけ、20テーマについてプレゼン・質疑応答した。学びの楽しさを知っただけでなく、個人的自己実現から社会的自己実現を目指す意味がわかったようである。 ・入試問題の出典を調べさせたりするなかで、県立図書館や市立・学校図書館に御世話になり、主体的読書活動を行っている。 ・夏には、例年より早く3年生との合同課外を実施し、現役生の牽引役を務めた。 ・2年生とのスクラム教育を英語と数学で実施し、後輩を指導しながら、伝えることの難しさを感じた。 ・帰省している専攻科OB・OGのミニ講演で、先輩から見通しのつく話をしてもらった。	A	・「学び祭」以後も、量は減るものの、質の高い読書を目指して、図書館を利用させる。 ・まだまだ、単なる浪人生との認識が校内にもあるので、「学びチューター」としての役割を果たすべく、現役生への出前授業を積極的に行う。 ・秋・冬、と夏以上に3年生との合同課外は増えるので、現役生を刺激するだけでなく、受験生の不安を取り除くべく良き相談役になるよう指導する。 ・学校に在ること満足しないよう、引き続きこまめに面談する。 ・センター前や前期試験前後に、引き続き、帰省しているOB・OGに経験談を話してもらう。
		・自己の進路目標を決め、その実現のために積極的に学習や行事等に取り組んでいる。 ・課題に真面目に取り組み、提出物の期限が守られている。 ・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。 ・生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・3年生19名のうち進学希望が8名、就職希望が11名であるが、まだ、自己の将来像を描いたり、進路を決めることが難しい生徒が多い。 ・中学校で不登校経験を持つ生徒や、進路変更で転編入した生徒が多く、まず登校レポートを提出することの指導が必要な生徒が多い。 ・基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。 ・生活環境面などで問題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。	・ハローワークやキャリアアドバイザーとの連携を密にし、正規採用を増やす。 ・卒業生等との座談会や進路講演会を効果的に取り入れ、進路意識の向上を図る。 ・特別支援の必要な生徒の個別指導や、進路に対応した課外・添削指導を工夫する。 ・積極的に面接や家庭訪問を実施して生徒一人ひとりのおかれている生活状況等を把握し、保護者と連携して進路実現に向けたきめ細かい指導を行う。 ・定期的に情報交換会を持ち、生徒個々の状況を職員間で共有して連携した指導を行う。 ・授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。 ・夏季休業中に登校日を設定し、長期休業中の生徒理解・指導に生かす。	・アルバイトや就職のことでキャリアアドバイザーのもとに相談に訪れる生徒が増えている。9月時点の就職受験者は2名だが、他の就職希望者に対しても継続して相談に乗っている。 ・夏季休業中の登校日に卒業生との座談会を開催した。改善点はあるが、卒業生の生の声が聞けて、進路を考える上で有意義であった。 ・職員間で情報交換を密にし、保護者と連携して欠席の多い生徒を粘り強く指導したが、長期欠席者が増えている。定期的なスクールカウンセラーとの相談に加え、心のケア支援をはかるために臨床心理士との個別面談も実施した。 ・夏季休業中に計画的に国数英の課外を実施した。参加者は少なかったが皆勤の生徒もいた。 ・授業公開期間を昨年より伸ばしたが、参観者があまり増えなかった。		・就職希望者の面接等の個別指導を職員間で連携して継続する。 ・課外を夏季休業後も継続実施し、学力の定着・向上を図る。 ・特別支援の必要な生徒の面接指導や進路に対応した個別指導を継続する。 ・担任以外の教員との面談や相談も工夫して、生徒理解をさらに深め、欠席者数を減らす。 ・他校視察で参考となった「基礎内容の指導」や「高校の学習へのかけはし」を職員間で共有して授業改善に生かす。 ・授業公開への参加者をさらに増やし、指導方法の工夫に生かす。
6. 定時制教育の充実	積極的な生徒指導 進路保障と学力の向上	・自己の進路目標を決め、その実現のために積極的に学習や行事等に取り組んでいる。 ・課題に真面目に取り組み、提出物の期限が守られている。 ・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。 ・生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・3年生19名のうち進学希望が8名、就職希望が11名であるが、まだ、自己の将来像を描いたり、進路を決めることが難しい生徒が多い。 ・中学校で不登校経験を持つ生徒や、進路変更で転編入した生徒が多く、まず登校レポートを提出することの指導が必要な生徒が多い。 ・基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。 ・生活環境面などで問題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。	・ハローワークやキャリアアドバイザーとの連携を密にし、正規採用を増やす。 ・卒業生等との座談会や進路講演会を効果的に取り入れ、進路意識の向上を図る。 ・特別支援の必要な生徒の個別指導や、進路に対応した課外・添削指導を工夫する。 ・積極的に面接や家庭訪問を実施して生徒一人ひとりのおかれている生活状況等を把握し、保護者と連携して進路実現に向けたきめ細かい指導を行う。 ・定期的に情報交換会を持ち、生徒個々の状況を職員間で共有して連携した指導を行う。 ・授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。 ・夏季休業中に登校日を設定し、長期休業中の生徒理解・指導に生かす。	・アルバイトや就職のことでキャリアアドバイザーのもとに相談に訪れる生徒が増えている。9月時点の就職受験者は2名だが、他の就職希望者に対しても継続して相談に乗っている。 ・夏季休業中の登校日に卒業生との座談会を開催した。改善点はあるが、卒業生の生の声が聞けて、進路を考える上で有意義であった。 ・職員間で情報交換を密にし、保護者と連携して欠席の多い生徒を粘り強く指導したが、長期欠席者が増えている。定期的なスクールカウンセラーとの相談に加え、心のケア支援をはかるために臨床心理士との個別面談も実施した。 ・夏季休業中に計画的に国数英の課外を実施した。参加者は少なかったが皆勤の生徒もいた。 ・授業公開期間を昨年より伸ばしたが、参観者があまり増えなかった。	B	・就職希望者の面接等の個別指導を職員間で連携して継続する。 ・課外を夏季休業後も継続実施し、学力の定着・向上を図る。 ・特別支援の必要な生徒の面接指導や進路に対応した個別指導を継続する。 ・担任以外の教員との面談や相談も工夫して、生徒理解をさらに深め、欠席者数を減らす。 ・他校視察で参考となった「基礎内容の指導」や「高校の学習へのかけはし」を職員間で共有して授業改善に生かす。 ・授業公開への参加者をさらに増やし、指導方法の工夫に生かす。

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60％～80％の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40％～60％の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40％未満である。